

主 題：信仰と罪：壊れた関係を修復する⑥

聖書箇所：コリント人への手紙Ⅱ 7章12－13節

テーマ：教会における兄弟姉妹の関係を含め、壊れた関係を修復するためには

今朝、皆さんと一緒に見ていきたいのは、Ⅱコリントの7：12－13のみことばです。私たちがコリントの教会に書き送ったパウロのことばを学び始めてから、いつの間にかひと月以上が経ちましたが、きょうもその続きの、特に壊れた関係を修復する六つ目の要素を見ていきたいと思います。

さて、これからきょうの内容に入っていくわけですが、その前に、時間も経って忘れていた部分があるかもしれないので、今まで見た内容を少し思い返してみましよう。

○壊れた関係を修復するための八つの要素

私たちは今、壊れた関係を修復するということに関して、パウロとコリントの兄弟姉妹との間に起った出来事の一つ一つを考えていました。コリントの人々の様々な罪によって傷ついていたパウロと、そんな彼と和解したいと強く願っているそのコリントの人々。そんな彼らの間に一体何が起きて、どのようにして関係が回復していったのか、八つの要素に分けて見てきました。

1. 慰めを与えてくださる神様 5－6節

まず一つ目に見たのは、慰めを与えてくださる神様の存在でした。そのことが5－6節に書かれています。外からの激しい迫害やコリントの教会との問題によって肉体的にも精神的にも意気消沈し、どん底にいたパウロを慰めたのはほかのだれでもなく、まず神様でした。どんな困難に会おうとも、それに勝る慰めを、主のうちに見出すことができるのだと。これが、私たちが覚えることのできる一つ目の要素でした。

2. 準備されていた恵みの態度 6－7節

二つ目に見たのは、準備されていた恵みの態度でした。6－7節にそのことが記されていました。ここで私たちが注目したのは、「コリントの教会が悔い改めた」との知らせをテトスから聞かされた時に見せたパウロの態度でした。覚えています？すごかったですね。パウロはコリントの人々によって何度も何度も傷つけられて嘆き悲しんでいたにもかかわらず、「彼らが心碎かれて罪から立ち返った」と聞けば、すぐに喜びにあふれていたのです。自分で復讐しようなんて考えていませんでした。パウロのうちには、彼らが悔い改める前から彼らのことをいつでも赦す態度が備わっていたのです。これが二つ目の要素でした。

3. 愛を伴う罪への戒め 8－9節

三つ目に見たのは、愛を伴う戒めです。それが8－9節のところに記されていました。コリントの人々をいつでも赦す備えのできていたパウロは、同時に、彼らを守るがゆえに罪を厳しく戒めていました。罪を妥協することもなければ、見て見ぬふりをすることもありませんでした。自分の愛する者たちがにせ教師たちに惑わされて誤った道へと進んで行っているのを目の当たりにした時に、彼はこれ以上その罪の危険に彼らをさらすことはできないと、行動したのです。もちろんパウロにとっても罪を厳しく責めることは容易なものではなく、感情的には難しさを覚えることもありました。しかし、そんな自分の思いを犠牲にしたとしても、愛する者たちの最善を願ったパウロは、正しく罪を戒めていたのです。これが三つ目の要素でした。

4. 神のみこころに添った悲しみ 8－10節

四つ目に見たのは、神のみこころに添った悲しみでした。8－10節にそれが記されています。ここまで私たちは主にパウロのとった行動に焦点を当ててきましたが、四つ目で注目したのは、パウロとの

和解を願うコリントの兄弟姉妹のうちに生じていた変化でした。パウロから罪を厳しく戒められた彼らがどんな態度を持つようになっていたのか。彼らは指摘されたことを言い訳したり、自分の犯した罪に単に悲しみを覚えてそれで終わり、ではありませんでした。彼らは自分たちの犯した罪が他のだれでもない神様の聖い御名を傷つけたのだということに心碎かれて、深く悲しんでいたのです。こうして神のみこころに沿って悲しんでいたからこそ、彼らのうちには悔い改めというものが生じていました。

5. 聖さを生み出す真の悔い改め 10-11節

そしてその悔い改めこそが、先週五つ目に見た要素、聖さを生み出す真の悔い改めだったのです。それが10-11節に記されていました。そのときにも言いましたが、四つ目と五つ目の要素には密接な関わりがありました。コリントの兄弟姉妹たちは神のみこころに沿って悲しんでいたからこそ、罪を悔い改めて、そこから離れて聖さを追い求めようとする者へと変えられていたのです。言い換えれば、真に悔い改める者というのは、自分のしたことが間違っていると認めて終わり、ではありませんでした。その者は神様を恐れて愛するがゆえに、自分の過ちを誠実に正したいとみずから熱心に神様と人との前にあかしを立てようとする者でした。そしてまさに罪を犯したコリントの兄弟姉妹たちはそのようにして、熱心さにおいても、弁明においても、憤りにおいても、恐れにおいても、慕う心においても、熱意においても、処罰においても、それらすべての点において自分たちが聖さを追い求める者へと変えられていたのだということを明らかにしようとしていました。だからこそ、そのことを聞かされたパウロは大いに喜んでいたのでした。

五つ見ました。もちろんこれがすべてではありません。でも、少なくともこれら五つのものが関係を修復する上で大切なものとして、パウロとコリントの教会の間に起きたその出来事から見て取れる要素でした。そして、私たちが見てきたこれらの要素というのは、傷ついたパウロのうちにも、また傷つけて和解を願うコリントの人々のうちにも、それぞれに見られるものでした。要するに関係を回復するためには、関係を壊した方にも、壊された方にもどちらにも大切な責任が与えられているということです。みことばは、自分がだれかを傷つけたときも、だれかに自分が傷つけられたときも、私たちが心を留めなければならない大切な真理をここに示してくれていたのです。だからこそ皆さん、今私たちが壊れた関係を抱えていたとしても、今は感謝なことにそんな関係を抱えていないとしても、続けて自分のこととして考えて見てください。自分はどこに慰めを見出そうとしているのだろうか。たとえば、自分を傷つけた相手が皆さんのところにやって来たら、今すでに自分にはその相手をいつでも赦す準備ができていのだろうか。兄弟姉妹のだれかが真理から外れているのを皆さんが目撃するなら、今、愛をもって戒めようとする準備ができていのだろうか。自分自身の罪でだれかのことを傷つけることがあったのなら、自分は神のみこころに添った悔い改めを本当にしているのだろうか？どれをとっても私たちの歩みにとって非常に大切なものでした。ですから残りの三つも順番に一緒に考えてみましょう。

きょう私たちは六つ目の要素を学んでいきます。今、復習したことも頭に入れながら5-13節の頭の部分まで見ていきましょう。5節からこのようにパウロは記していました。

コリント7：5-11

「:5 マケドニヤに着いたとき、私たちの身には少しの安らぎもなく、さまざまの苦しみに会って、外には戦い、うちには恐れがありました。:6 しかし、気落ちした者を慰めてくださる神は、テトスが来たことによって、私たちを慰めてくださいました。:7 ただテトスが来たことばかりでなく、彼があなたがたから受けた慰めによっても、私たちは慰められたのです。あなたがたが私を慕っていること、嘆き悲しんでいること、また私に対して熱意を持っていてくれることを知らされて、私はますます喜びにあふれました。:8 あの手紙によってあなたがたを悲しませたけれども、私はそれを悔いていません。あの手紙がしばらくの間であったにしろあなたがたを悲しませたのを見て、悔いたけれども、:9 今は喜んでいます。あなたがたが

悲しんだからではなく、あなたがたが悲しんで悔い改めたからです。あなたがたは神のみこころに添って悲しんだので、私たちのために何の害も受けなかったのです。：10 神のみこころに添った悲しみは、悔いのない、救いに至る悔い改めを生じさせますが、世の悲しみは死をもたらします。：11 ご覧なさい。神のみこころに添ったその悲しみが、あなたがたのうちに、どれほどの熱心を起こさせたことでしょうか。また、弁明、憤り、恐れ、慕う心、熱意を起こさせ、処罰を断行させたことでしょうか。あの問題について、あなたがたは、自分たちがすべての点で潔白であることを証明したのです。：12 ですから、私はあなたがたに手紙を書きましたが、それは悪を行った人のためでもなく、その被害者のためでもなくて、私たちに對するあなたがたの熱心が、神の御前に明らかにされるためであったのです。：13 こういうわけですから、私たちは慰めを受けました。」

6. 熱心さを思い出させる愛 12-13 a 節

さて、壊れた関係を修復するための六つ目の要素として挙げられるもの、それは「熱心さを思い出させる愛」です。パウロはコリントの兄弟姉妹に働きかけて、熱意というものを思い起こさせようとしていました。でも一体それはどういうことなのでしょう。パウロは12節でこのように記してありました。もう一度12節見ていただくと、「ですから、私はあなたがたに手紙を書きましたが、それは悪を行った人のためでもなく、その被害者のためでもなくて、私たちに對するあなたがたの熱心が、神の御前に明らかにされるためであったのです。」これを読んで気づかれたかと思いますが、パウロはここで、自分自身の書き送った厳しい手紙について再び触れていました。彼はなぜ自分が手紙を書き送ったのか、その動機、理由について述べていたのです。でも少し不思議に思う人もいるかもしれません。皆さん覚えておられるかと思いますが、手紙の説明のことであれば彼はもう以前に何度かしていましたね。2章に戻ってみれば、彼は繰り返しこんなことを言っていました。2：3を見てみると「あのような手紙を書いたのは、私が行くときには、私に喜びを与えてくれるはずの人たちから悲しみを与えられたくないからでした。」と、まず手紙について書いていました。4節にも「私は大きな苦しみと心の嘆きから、涙ながらに、あなたがたに手紙を書きました。それは、あなたがたを悲しませるためではなく、私あなたがたに對して抱えている、あふれるばかりの愛を知っていただきたいからでした。」そして少し飛んで2：9にもこう書いています。「私が手紙を書いたのは、あなたがたがすべてのことにおいて従順であるかどうかをためすためであったのです。」またちょっと戻っていただいて7：8-9でも、彼はまた手紙について触れていたのです。このように見ていくと、ある人はこんなふう思ったかもしれません。どうしてパウロはこう何度も何度も手紙に対する自分の動機、何で手紙を書いたのかということをしつこく繰り返しているのだろうか？ちょっとしつこくないですか？でも、このようなパウロのことばを考えれば考えるほど、私たちは彼が抱えていた“葛藤”というものと、“大きな愛”というものを覚えることができるのです。どういうことか。皆さん、今一度パウロの姿を想像してみてください。

以前、三つ目の要素である「愛を伴う罪への戒め」を学んだ時にも触れましたが、彼は自分自身の書き記した手紙の内容があまりにも厳しいものであったので、それがコリントの人々に悲しみや涙をもたらすことになるということをよくわかっていました。自分のことばがコリントの兄弟姉妹たちの心に深い痛みを与えることになるということを、彼は手紙を書いている段階からあらかじめ理解していたのです。どんな結果が伴うのかを彼はわかっていました。でも、たとえどれほど心を悲しませることになろうとも、彼らのことを心から愛していたパウロは涙ながらに手紙を書き送りました。パウロは愛する者たちが罪に陥って真理を離れてしまい、間違った道へと進んでいるのを目の当たりにした時、到底そのことを見て見ぬふりをすることはできなかったのです。それが、彼が示した愛でした。でもそれと同時に、パウロは大きな不安も抱えていました。彼はその厳しい手紙がコリントの人々のもとに届けられたときに、頑なな彼らがそれにどう応答するのか、それがわからなかったのです。悲しみをもたらすことになるということはわかっていました。でももしかしたら、兄弟姉妹たちは自分のことばを間違っ

け取ってしまって、本当に伝えたい思いが伝わらないかもしれない、彼らに対して深い思いから綴った自分のことばの意図が伝わらずに、逆に、こんなことばを書くパウロはやっぱり愛のない人物だと、ますます彼らの心を閉ざすことにつながってしまうかもしれない。彼らへの愛を表すために記したその手紙によって、愛に誤解が生じてしまうかもしれない…こういった不安を覚えていたからこそ、以前にも私たちは見ましたが、テスからの報告を待っている間のパウロの心には、いっさいの安らぎもなければ、恐れも生じていたのです。これが、パウロが抱いていた葛藤でした。でもそのことを考えれば、なぜパウロが繰り返しどんな動機で自分が手紙を書いたのかを口にしながらよく理解できません？確かにパウロは厳しい手紙を書きました。それによってコリントの人々が涙を流すことになるということもわかっていました。実際そうだったのです。しかし、それは決して彼らを単に傷つけたり悲しませることが目的ではありませんでした。パウロの厳しさというのは、すべて彼らに対する愛が動機だったのです。彼はコリントの兄弟姉妹のことを心から気にかけていたからこそ、その罪を正しく攻めようとしたのです。パウロはその意図を絶対に勘違いして欲しくないと思っていました。だれひとりとして、彼らに対する自分自身の思いやりや愛の心というものを疑ってほしくない強く願っていました。だからこそ、彼は手紙を記した自分の思いや動機を繰り返し繰り返し口にしていたのです。コリントの兄弟姉妹に対するパウロの思いは、それほどまでに深く揺るがないものでした。

考えれば考えるほどこれはすごい思いやり、愛だと思いませんか？改めて私たちが覚えたいのは、彼のコリントの兄弟姉妹に対する愛というのは、彼らの態度によって左右されるものではなかったということです。自分の思いどおりに相手がふるまわなければ、それによって失われてしまうというようなものでは全くありませんでした。またもっと言うならⅠコリント4：14にも、彼は自分が手紙を書いた目的をこのように書いていました。14節に「私がこう書くのはあなたがたをはずかしめるためではなく、愛する私の子どもとしてさとすためです。」と。ここでもパウロは同じでした。彼は様々な罪が蔓延していたコリントの教会の過ちを見て見ぬふりをすることは決してありませんでした。決してあり得なかったからこそ、このときも彼らに手紙を送っていましたが、その動機も彼らをはずかしめるためではありませんでした。彼らに対するその愛のゆえにそのことを行っていたのです。まるで、愛する自分の息子の最善を父親が願って懲らしめを与えるかのように、パウロはコリントの兄弟姉妹の最善を願って愛によって戒めというものを何度も与えようとしていました。

パウロは、たとえ罪を犯してどんなに愚かなことをしていたとしても、自分がコリントの人々の霊の父であり、彼らが自分にとっての霊の子どもであることを忘れてはいなかったのです。もっと言うなら、パウロは、コリントの人々が今見せているふるまいではなくて、キリストの福音がすでにもたらした変わることをないその事実を心に留めていた、ということです。彼はキリストによってもたらされていた自分とコリントの兄弟姉妹との関係をいつも覚えていました。彼らは私にとって霊の子どもなのだ、何をしようが彼らは私にとって霊の子どもなのだ。だからこそ、そんな彼らに対するパウロの愛は、いつも変わることはなかったわけです。マッカーサー先生も霊の子どもたちに対して、パウロが示したその深い愛についてこんなことばを残していました。「コリントの人々はパウロの愛に値するようなことをほとんど為していませんでしたが、その愛を十二分に受けていました。パウロの愛はすべてを与え、何も求めませんでした。それは自己犠牲的で、広範囲に及ぶ、いつまでも変わらないものだったのです。」パウロは「相手がどうだから、私はこうします」と変わってはいませんでした。彼の愛というのは、いつも変わらないものでした。

だとすれば皆さん、自分自身にも問いかけてみる必要があります。私たちが日々示している愛は、果たしてパウロのような自己犠牲的でいつまでも変わらないものなのでしょうか？相手がそれに値しないような者であろうと、惜しみなく与えようとするそんな愛でしょうか？それとも相手が自分の思い通りにならなければ、相手によって変わってしまう愛ではないのでしょうか？もちろん、私たちがこのような

愛を実践しようとするときに確かに難しさを覚えることがあります。でも皆さん、そんなときこそ私たちはあることを思い出し続けなければいけないのです。それは、果たして自分自身はどのようにして神様から愛をいただいたのか、ということです。また同じように、キリストによって救われた他の兄弟姉妹との関係は、今すでに自分にとってどんなものへとなっているのかということです。改めて考えてみてください。神様は、私たちが神様の御前に何か正しいことや喜ばれることを成したから、それに値することを成したから、ご自身の愛を与えてくださったのでしょうか？私たちが神様をまず愛したから、その見返りとしてこの方は私たちを愛してくださったのでしょうか？いいえ、そうではありませんでした。この方は、私たちがまだ不敬虔で敵としてこの方に逆らって歩んでいた時に、私たちが罪人としての怒りを受けて当然のその時に、私たちに恵みによって大きな愛を示してくださったのです。Iヨハネ4：10にも書いていました。「私たちが神を愛したのではなく、神が私たちを愛し、私たちの罪のために、なだめの供え物としての御子を遣わされました。ここに愛があるのです。」と。そしてこのような愛に対して、同じように悔い改めと信仰をもって応答した者たちは、みな、恵みによって同じ神の家族に属する者としてもう召されたわけです。そのことは前も見ました。キリストの福音によって、私たちは他の兄弟姉妹とすでに一つとされているのです。それが私たちにみことばが教えてくれている変わらない事実でした。

でも皆さん、実際はどうでしょう？もしかすれば、だれかが罪を犯しているときに、私たちはこの変わらない事実を忘れてしまっているのかもしれないかもしれません。その人との関係が、自分にとって重要なものであると思えなくなっているのかもしれないかもしれません。だから私たちはパウロの模範に倣うことです。パウロは、たとえコリントの人たちが罪を犯して愚かなことをしていたとしても、キリストの福音が彼らの間にもたらした変わらない事実を心に留め続けていました。もちろん罪を見て見ぬふりをすることはしませんでした。彼は自分にとってコリントのひとりひとりが愛する霊の子どもであると覚えていたのです。それがもう自分に与えられた変わらない事実だと覚えていました。だからこそ、たとえ彼らがどのような態度であろうとも、どんなときも彼らに対して思いやりを示して彼らが最も必要としていたその愛をパウロは実践していたのです。それが、私たちが見てきた罪を戒めるあの厳しい手紙だったわけです。彼らはそれを必要としていました。ですから、それをパウロは与えたのです。

さて、ここまで私たちはパウロが持っていた愛について見てきました。パウロはコリントの人たちに対して変わらない愛を抱き続けていました。そしてそれを動機として、彼らを思うその気持ちから手紙を書き送ったのです。それは紛れもない事実です。この12節を見ると、彼が手紙を送ったことに関して詳しい動機をここに加えてくれていました。一体どんな思いで手紙を記していたのか。12節をもう一度見てみると、パウロはこのように言っています。「それは悪を行った人のためでもなく、その被害者のためでもなくて、私たちに對するあなたがたの熱心が、神の御前に明らかにされるためであったのです。」と。さて皆さん、何の目的でパウロが記していたのか分かりましたか？もしかすると少しわかりにくかったかもしれません。ある人はこれを読んだときにちょっと不思議に思ったかもしれません。悪を行った人のためでもなく、その被害者のためでもなく、私たちに對するあなたがたの心が明らかにされるためだった…でもよく考えてみたら、これは最後だけでよくないですか？なんでわざわざパウロは、これでもなくて、あれでもなくて、このためでした、と回りくどい言い方をしたのでしょうか？簡潔に言うなら、「私はあなたがたに手紙を書きましたが、それは私たちに對するあなたがたの熱心が神の御前に明らかにされるためであったのです。」と言っても私たちがわかりやすく思えたかもしれません。でも、彼は実際にそうは言っていませんでした。なぜか？それはここに、ある意図というものが含まれていたからでした。

●ヘブル語の表現方法：

この部分を正しく理解する上で、私たちは、パウロがヘブル語にある一つの表現方法をここで用いていたことを覚える必要があります。パニックにならないでくださいね。どんな表現方法だったのかと言えば、それは著者が選択肢を提示して、その一方をあえて否定することで、残りの内容を強調するというものでした。ヘブル語の話し方の中には、一方の内容を強調するために、あえてそれと比較する内容を否定的なことばで表現するということがあります。一つ具体的な例を見てみましょう。そうすれば分かってもらえるかと思います。ホセア6：6にこう書いていますね。「わたしは誠実を喜ぶが、いけにえは喜ばない…」と。ここで神様は明白に前者と後者を比較しておられました。ちょっと考えてみてください。この箇所確かに主は、「わたしは…いけにえは喜ばない」と、口にされていたわけですが、果たしてこれは、主がいけにえそのものをいっさい喜ばない、ということを行わんとしたのでしょうか？もちろんそうではありません。神様は別に、いけにえのすべてを喜ばれない、そのすべてを禁じている、という話をなさったわけではありません。では何を言わんとされたのでしょうか？それは、「神様はいけにえよりも、人々の誠実さをより喜ばれる」ということでした。いけにえを否定したのではなく、単純にそれと比べて、もう一方の誠実さというものを強調していたということです。これと同じことをパウロはここでしていました。つまり彼は、確かにここで「悪を行った人のためでもなく、被害者のためでもなく」、と口にしていたのですが、これら二つの理由を彼が完全に否定していたのではなかったということです。もちろん、これらも厳しい手紙を書く上でその動機のうちに含まれていたのですが、ある意味それは当然のことですね。教会全体の前で非難をされて辱めを受けてしまった被害者であったパウロは、自分に悪を行った者に対して正しい対応がなされることを願ってはいました。そしてそのことは、パウロにとってだけでなく、コリントの教会にとっても非常に大切な課題でもあったわけです。その二つの最初の理由…悪を行った人のためでもなく、その被害者のためでもなく…を完全に否定していたわけではなかったのです。では、何をしていたのかというと、それをあえて出すことで、最後のものを強調しようとしていたのです。では、何を強調しようとしていたのか？何を最も重要な動機として考えていたのか？それが12節の最後にこう書かれていました。その目的というのは「私たちに對するあなたがたの熱心が、神の御前に明らかにされるためであったのです。」と。コリントの兄弟姉妹の熱心さが神の御前に明らかにされること…これが、パウロが何よりも望んでいたことでした。ここでも気づきませんか？やっぱり彼が最も気にかけていたものは、悪を行った者のことでも自分自身のことでもなかったのです。彼はいつもコリントの兄弟姉妹のことを心にかけていました。愛する自分の霊の子どもたちである彼らのことを、パウロはいつも思っていたのです。

●罪の持つ危険性：人々を欺す性質

ここでちょっと考えてみましょう。パウロは手紙を記した目的が、「彼らの「熱心が神の御前で明らかにされるため」だった」と言っていたのですが、これはいったい具体的にどういう意味なのでしょう？このことを考える上で、皆さんに一つカギとなる注目してほしいものがあります。それは、この「明らかにされる」という動詞です。この「明らかにされる」と訳されていることばは、もともと「公に知られるようになる」とか「隠れていた物をあらわにする」といった意味が含まれています。つまり、ある時コリントの人々の熱心さというものは、何らかの理由で隠れてしまっていたということです。そのことが、パウロは手紙を書き送ることで再び明らかにされることを願っていたということです。もっと言えば、パウロはコリントの人たちに、私たちに（私たちがとは、おそらくパウロやテトスを表しますが）對する隠れて見えなくなっている熱心さというものを改めて神の御前で公にしよう、彼らにそのことを思い出させようとしていたということです。これがコリントの教会が抱えていた問題でした。彼らというのは、自分たちが犯した罪によって、パウロや、また彼が教えたキリストの福音というものに対する熱意を失ってしまっていました。忘れ去っていたのです。本当であればその心の内に持っているものですが、にせ教師たちにだまされてしまって、罪を繰り返して犯していたことによって、彼らはそのこ

とに気付けなくなっていたのです。彼らの心から熱意というものが失われていたからこそ、彼らはパウロに対して頑なに逆らい続けていました。何よりもキリストの福音のすばらしさを忘れたからこそ、それを拒んで捨てるようになっていたのです。にせ教師の教えに流されていっていました。ポイントは、罪によって盲目になっていた彼らは、パウロの働きを感謝することも、真理を受け入れることもできなくなっていたというわけです。ですから、彼らは非常に危険な状態にありました。それでパウロは見えなくなっている彼らの熱意が再び神様の御前に明らかになることを心から願って、厳しい手紙を書き送ったというわけです。その手紙を書き記した時、彼の心はコリントの人々への思いであふれていました。「兄弟姉妹たち、あなたがたのうちには、本当は私に対してもキリストに対しても愛や熱意があることを私はよく知っています。あなたがたと私は18ヶ月の間ともに時間を過ごしました。その時に私がどれほど愛しているのかをあなたがたはもう知っています。でも今のあなたがたは、罪深さのゆえにそれに気づくことができなくなっているのです。みことばや神様への思いも、罪によって覆い隠されてしまっているのです。だから、どうか私のことばに耳を傾けてください。そして今一度、かつて持っていたその熱心さを思い起こしてください。」これが、パウロがコリントに厳しい手紙を書いた目的でした。

このことを考えるときに、私たち自身も改めて考えてみななければいけないことがあります。それは罪というものが人をだます、人を欺く性質を持っているということです。罪というものがその性質において、人を盲目にさせるそのものである、ということ絶対に忘れてはいけないということです。もちろん、私たちはキリストの十字架と復活の御わざによって罪の力が砕かれたことを知っています。かつて罪の奴隷として歩んでいた者たちが、キリストによって義の奴隷として歩む者へと造り変えられるのです。でも同時に、そのようにして救われて新しくされた私たちのうちにも、罪の性質はまだ存在しています。そして罪の性質が存在しているからこそ、それによってだまされることがあるのです。そんな心が誘惑されて頑なにになってしまったり、悲しいことに罪から離れたいと願っても、何度も何度も罪を犯して神様を悲しませることもあるのです。罪は私たちをだまそうとするのです。嘘をつくわけです。私たちは最初からだれの目にも深刻な罪を犯すことはないかもしれませんが。でも一見すると小さな問題に見える罪を妥協して行って、主の前に悔い改めるのではなくてそれを放置し始めるのであれば、次第にその心は深刻な罪へと陥っていくのです。皆さん、人を欺く性質を持っているその罪が、私たちの内に存在しているということは、私たちはそれによって惑わされて盲目の状態に陥るということ、その危険があるということです。こんなことばを霊的な盲目さに関してポール・トリップ先生も残していました。「霊的な盲目は、肉体的な盲目とは異なります。肉体的な盲目であれば、自分が見えていないことを自覚しているので、その重大な身体の欠陥を補うことができるのです。しかし、霊的に盲目の人は、目が見えないだけでなく、自分が盲目であることにも気付いていません。彼らは自分がよく見えていると思っているので、霊的に盲目の人は、自分自身より正確に自分を見ているものはいないと幻想を抱きながら、歩きまわっているのです。」自分自身がそれに対し盲目であるからこそ、私たちは、自分は大丈夫だと思い込むことがあります。私たちはほかの人の罪に気付くのは恐ろしく早いのに、自分の罪に気付かないことがあります。そしてそんな私たちは、自分自身のことばはほかのだれよりも自分が一番よく理解している、わかっていると考えていたりするのです。持っていないと言う方があるかもしれませんが、そんな思いを自分が持っているかはこのようにして判断できると思います。その一つには、もしそのような思いを持っていれば、周りのだれかがやって来て、自分の見えていなかった部分を指摘するようなときに、それに対して怒りや不満というものを覚えるということです。「自分のことは自分が一番わかっています、だから、あなたなんかになんかそんなこと言われる筋合いはありません、そのような問題は自分にはありません」そう反論してその人のことばを素直に受け入れようとしないこともあります。これが皆さん、罪がもたらす影響です。自分には、自分のうちにある罪が見えていないことがあるので

す。そして多くの場合、私たちの周りの人のほうがよく見えていることがあります。自分に見えていると思っても、人を欺くその罪を内に持っている私たちには、実際に見えていない場合があるということです。

では、どうすればこのような危険な罪の惑わしに勝利することができるのでしょうか？そのことに関してヘブルの著者はこんなことばを残しています。ヘブル3：12－13で「:12 兄弟たち。あなたがたの中では、だれも悪い不信仰の心になって生ける神から離れる者がないように気をつけなさい。:13 「きょう」と言われている間に、日々互いに励まし合って、だれも罪に惑わされてかたくなにならないようにしなさい。」と。ここでもはっきりと言われていました。「あなたがたの中で罪によって悪い不信仰の心になり生ける神から離れることがないように気をつけなさい。だれも罪に惑わされてかたくなにならないようにしなさい。」「罪は惑わすのだ」と聖書は教えているのです。ここで「不信仰の心になって生ける神から離れる者がないように」しなさい。」とヘブルの著者は言っていたのですが、勘違いしてほしくないのは、これはもちろん、救われている者が救いを失う可能性があるという話をしているわけではありません。真に救われている者がその救いを失うことは絶対にない、ということです。それはほかのみことばでも、繰り返し、繰り返し教えてくれています。それが私たちの喜びであり希望になるのです。イエス様もこのように言われていました。ヨハネ10：27－29で「:27 わたしの羊はわたしの声を聞き分けます。またわたしは彼らを知っています。そして彼らはわたしについて来ます。:28 わたしは彼らに永遠のいのちを与えます。彼らは決して滅びることがなく、また、だれもわたしの手から彼らを奪い去るようなことはありません。:29 わたしに彼らをお与えになった父は、すべてにまさって偉大です。だれもわたしの父の御手から彼らを奪い去ることはできません。」と。「だれもわたしの父の御手から彼らを奪い去ることはできません。」…私たちがよく知っている通り、救いは初めから終わりまで自分たちの努力や力によって与えられるものではありませんでした。救いを与えてくださるのは神様であり、救われた者をいつまでも守ってくださるのも神様だったのです。神様が「だれもわたしの父の御手から彼らを奪い去ることはできません。」と約束してくださっています。神様が守ってくださるからこそ、だれもその手から私たちを、信仰者たちを奪い去ることができる者はいない、と言うわけです。ではここで、「生ける神から離れていってしまう者」と言われたときに、これはいったいどんな人物のことを言っていたのでしょうか？それは、初めから本当の救いを持っていなかった者のことです。この人物は、初めからキリストのことを知らなかったもので、時が来れば、罪によって心が固くなって、ついには信仰を捨ててしまうことになるのです。初めは口で信仰を告白して、教会に熱心に通って様々の働きを行っているかもしれませんが、けれど次第にその歩みが告白とはかけ離れたものになっていくのです。みことばが教えることよりも、罪を愛するようになっていきます。神様に従うことよりも、この世の楽しみに心が奪われるようになっていくのです。みことばははっきりと、救いを本当にいただいている者は決してそれからこぼれ落ちることはない、と教えてくれています。もし最初から救いに根差していなければ、時が経つに連れて生ける神様からみずからの意思で離れて行くようになる、ということも教えているのです。これは非常に恐ろしい警告でした。でもこれは事実として書かれているのです。これに対してもっと色んなことが言えますが、きょう注目して欲しいのは、そんな恐ろしい危険に対してヘブルの著者が何を求めていたかということです。その危険を避けるためにどんなことを教えていたでしょう？こう記されていましたね。

「「きょう」と言われている間に、日々互いに励まし合って、だれも罪に惑わされてかたくなにならないようにしなさい。」と。求められていたのは、兄弟姉妹たちが罪に惑わされないようにと、互いに励まし合うことでした。どうして励まし合うのか？それは自分ひとりだと絶え間ない罪の誘惑や罪との戦いによって心が惑わされて、覚えているべき真理を忘れてしまうことがあるのです。苦しみによって心が悲しんでしまうこともあるのです。私たちは互いに励まし合うことが必要だと教えられていました。この「励まし合」うということばには「だれかをそばに呼び寄せる、助けを、慰めを与える」という意味があり

ます。だれかをそばに寄せるのです。私たちはいつもそばにやって来て真理を語ってくれる兄弟姉妹が必要だ、ということです。神様がどれほど偉大なお方なのかということ、キリストの救いというものが私たちにあってどれほどすばらしくてあわれみ深いものなのかということ、キリストにある救いというものが、満足というものがどれほど私たちにあってすばらしいものであるのかということ、そのような希望や約束や喜びを私たちが思い出し続けることができるように、いつも寄り添って励ましてくれる人が欠かせないというわけです。「最後まで頑張れ！ゴールまでもう少しだ！」と。たとえば、駅伝やマラソンの場面を見ると、最後のゴール手前で励ます人がいるのを見るでしょう。信仰のレースも同じです。私たちは同じ主を愛して、同じ目標を目指して歩んでいるからこそ「大丈夫だ！キリストに従っていけばそこに喜びがあるんだ！それこそが私たちにあって本当の満足なんだ！」と、そのことを励まし続けるそんな兄弟姉妹が必要なのだと。

でも同時に、この「励ま」すということには、そのようにして助けや慰めを与えるという意味のほかにも、「戒める」とか「さとす」という意味もあるのです。ですから、兄弟姉妹というのは、互いを励まし合うことももちろんするし、ときに戒め合うことも求められているということです。もしだれかが間違っている道を進んでいるなら、「あなたが行っていることは間違っていますよ、それは神様の前に大きな罪です、悔い改めてキリストに立ち返らないといけませんよ。」と愛をもって戒めてあげることもそれぞれの歩みにとって欠かせない大切な要素だということです。私たちは罪にだまされて心が頑なにならないように、ともにキリストの福音を語り合っ、いつもみことばの真理を覚え続けることができるように助け合う必要がある、というわけです。自分が本当に信仰に立ち続けているのか、持った信仰を固く最後まで持ち続けていくためにそのことを励ましてくれる信仰の友が必要だということです。

そしてここで皆さん考えてみて下さい。今、私たちは命令を見たわけですが、この命令というのは、どれぐらいの頻度で行いなさいとヘブルの著者は求めていましたか？こう書いていましたね。「日々」と。「日々」とはどういう意味ですか？それは、そのまま毎日ということですね。気が向いた時でもなければ、ましてや日曜日に教会に来た時だけでもありません。また、これは日々を行うものですが、同時にどれぐらいの期間を行うようにと著者は求めていましたか？こう書いていましたね。「「きょう」と言われている間に」と。これはどういう意味だと思います？考えてみてください。きょうは日曜日ですね。日付が変わってあす月曜日になって私たちがたどり着くことができれば、月曜日のことを何と呼びます？月曜日を「きょう」と呼びます。火曜日になって私たちが火曜日に到達すれば、私たちはその火曜日のことを「きょう」と言います。つまり「「きょう」と言われている間に」というのは、私たちが死ぬまでか、キリストが私たちを迎えに来てくださる再臨があるまでずっと行い続けるべきものなことです。「きょうそれをしなさい」と。これは神様からの命令です。だからこそ皆さん、私たちがもし教会生活というものを日曜日だけのものと考えているのなら、礼拝生活というものを毎日のものであると、いつものことであると考えていないのなら、その考え方は改めないといけないということです。ある人はこんな思いを持っているかもしれません。…私は日曜の礼拝に忠実に出席しているから責任を十分に果たしています。加えて、もし水曜日の祈禱会に出ているのであれば、ほかの人以上に私はほめられるべきです…礼拝に出席することも祈禱会に出ることも、それを否定しているわけではありません。それはすばらしいことです。でもそれだけが、神様の家族としてキリストのからだとして生かされている私たちの生き方ではないということです。きょうと言われている間に日々それをしなさいと。

私たちの周りにはたくさんの誘惑であふれています。皆さん、私たちそれぞれのうちにも罪の存在があることを知っているわけです。その罪との葛藤を日々経験します。私たち自身はその罪にだまされてしまうことがあるのです。考えてみれば、コリントの兄弟姉妹はあのパウロからみことばを教えられてい

ました。しかし、そんな彼らも真理を忘れて罪に陥っていたのです。それなら私たちはみな当然、ほかの兄弟姉妹の助けが必要だと思いませんか？福音や神様を忘れてしまうことがないように、だれも罪に惑わされて頑なにならないように、日々互いに励ましていくことが必要だと思いませんか？本当に日曜日だけでいいのでしょうか？本当に水曜日だけでいいのでしょうか？私たちは罪との戦いを日々経験するのです。みことばが私たちに教えてくれていたことは、私たちは日々他の兄弟姉妹とともに励まし合って歩んでいきなさいと。それが、私たちが罪によって心が固くならないように神様が与えてくださった方法でした。

〇まとめ

さて、きょう私たちは、壊れた関係を修復するための六つ目の要素、「熱心さを思い出させる愛」について学びました。パウロは、にせ教師や罪によってだまされていたコリントの兄弟姉妹の罪を、手紙を通して厳しく指摘していました。でもそれは、彼らのことを嫌っていたのでもなければ、彼らを単に悲しませようとしていたのでもありませんでした。パウロは自分の愛する兄弟姉妹たちが自分のことに関して、また何よりもキリストの福音に対して熱意を失ってしまっているということを目の当たりにし、そのことを見過ごすことをしなかったのです。彼らの熱意が隠れてしまっている、彼らが罪によって盲目となっている、そのことに気づいた彼は、本来持っている思いや本来持っている熱心さというものに立ち返ることができるようにと愛をもって励まし、そして厳しいことばで戒めたのです。そんな熱心さを思い出させる愛というものがコリントの教会には必要でした。

そして、それは今の私たちも同じだということです。私たちも日々、悪や誘惑との戦いを経験して、救われた後もみな私たちのうちに存在する罪に惑わされることがあるのです。私たちにはいつもそばに寄り添ってくれて、キリストこそが唯一の道でありそこにのみ喜びがあるのだと、そう教え続けてくれる兄弟姉妹が欠かせないということです。だから皆さん、いつもとちょっと違うかたちになりますが最後に一緒に考えてみましょう。私たちは「「きょう」と言われている間に、日々互いに励ましあって、だれも罪に惑わされないようにしなさい。」という命令を見ました。神様からの命令を見たわけでは、これを実践しましょう。何らかのかたちで悩んでいたり苦しんでいる兄弟姉妹のことを、今その場で思い返してみてください。もしくは、最近あまり会話のできていない、近況があまりわかっていないそんな兄弟姉妹のことを思い浮かべてみてください。思い浮かべました？では、周りを見渡して目に入った兄弟姉妹のだれでもいいので、その人を励ますために何ができるのかを考えてみてください。みことばは「「きょう」」それをやりなさいと言っています。きょう帰ってからでもいいですが、でも皆さん、私たちはきょう帰る前にだれかのところに行って、キリストのすばらしさを語り励ますことができます。祈りをしてともに励まし合うこともできます。そのようにして私たちはともに励まし合って支え合いながら歩いていくということ、その大切さを実践していくのです。ですから強制と言いませんが、でも皆さん、きょう帰るまでにだれかひとりでも捕まえて、そのことをともに祈って考える時間を持ちましょう。今から私たちは遣わされた所に出ていきます。ライブを見ている方もこれから出て行きますが、その場所においてもその兄弟姉妹のことをともに覚えて、互いに励まし合って祈り合いながら歩いていきましょう。キリストがいかにすばらしいお方なのか、福音がどれだけすばらしいことなのか、そのことを互いに思い出させ合う者としてともに成長していきましょう。